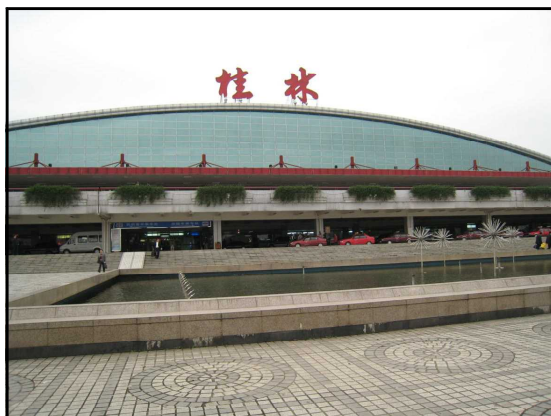


一木造建築文化とそこに暮らす人々

◇桂林市内

§ 桂林空港



§ 桂林の町と近くの山なみ（独秀山からの眺め）



§ 桂林市内の風景 水面の鏡像



§ 八路軍記念館（桂林市内）



風光明媚な漓江下りで有名な桂林は、中国の南部の広西チワン族自治区の北東部にあります。桂林の「桂」は、日本ではカツラの木を指しますが、中国ではモクセイです。キンモクセイ、ギンモクセイの香りが良いモクセイの木です。町にはこの木が多くありました。

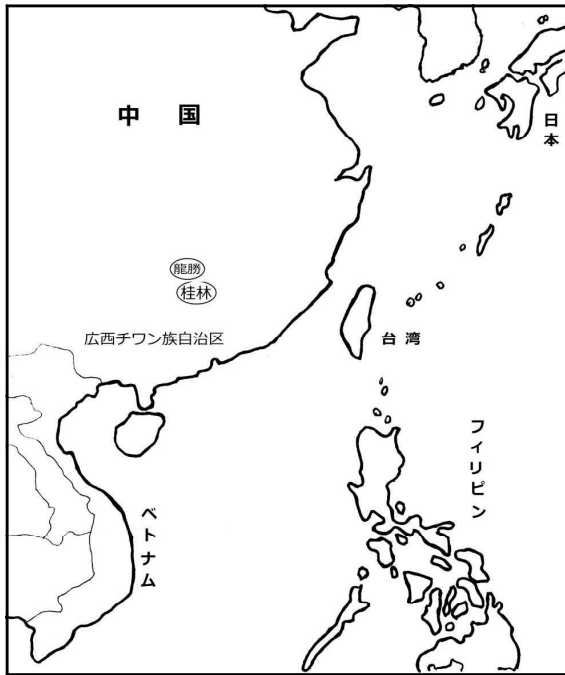
この地方は石灰岩でできたカルスト地形だそうで、長年の雨水で岩が溶け、広い地域で奇妙な山々を見ることができます。乾燥した山岳地帯や砂漠が多い中国全体から見ると、ここは適度な湿り気があり、水もきれいで、自然に恵まれた土地です。

この行政区には名前のおり、少数民族のチワン族が多く住んでいます。もちろん都市部には漢民族が多く住んでいます。そのほかにもトン族やヤオ族などの少数民族が住んでいます。

また、桂林は毛沢東が率いる八路軍の長征経路の一つとしても有名です。右の写真はその記念館です。

◇漓江下り

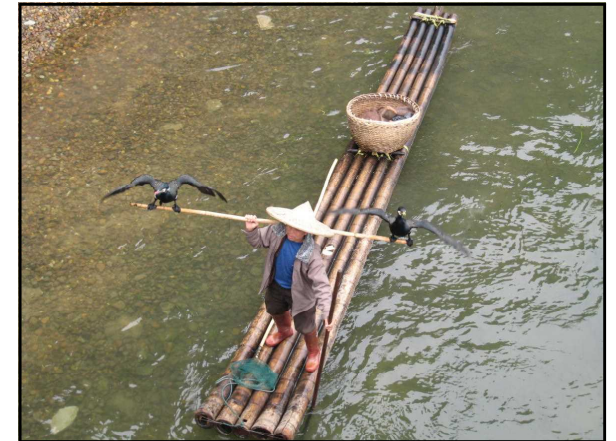
§ 桂林・龍勝の位置



§ カルスト地形が造形した幻想的な風景



§ 観光のための鵜飼の実演



漓江は広西チワン族自治区の大河西江の支流ですが、新潟県の信濃川よりも大きく見えました。兩岸の高い山々の風景はほんとうに山水画を思わせるようでした。

この漓江の風景は、中国の20元紙幣の絵にもなっています。

この河でも伝統的な鵜飼いの漁法が行なわれていたようです。右の写真は、竹の筏に乗って飼い慣らした鵜を操る鵜匠ですが、今では観光目的です。日本では現在、岐阜県の長良川、京都の大堰川や宇治川などで観光用に行なわれています。昔は、このような漁法が東アジアで広範に行なわれていたのですね。

◇桂林市内から龍勝へ

§ 龍勝各族自治県の村道



§ 漢族の村のある家の居間（正面に祭壇）



§ 清明節前日市場（墓参り用品）



◇龍脊の棚田に暮らす人々

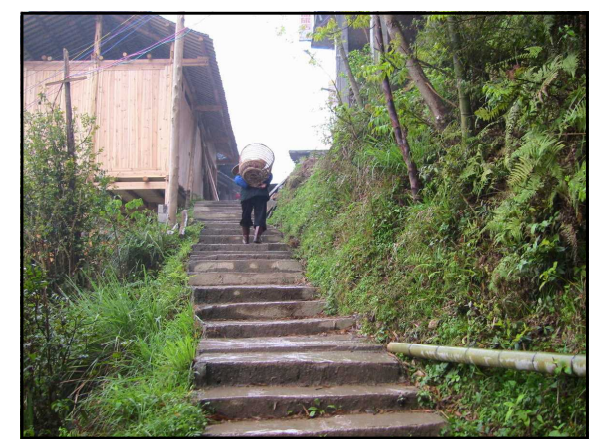
§ チワン族平安村



§ 山の中腹にあるチワン族平安村



§ 現地の人々は足腰が強くなければ暮らして行けない



§ 龍脊の棚田風景



§ 急勾配の山の斜面に建てられた民家



§ 民家の床下は広々とした空間



桂林の北部にある山岳地帯、龍脊地区に、見事な棚田があります。この地区の、チワン族が暮らす平安村は観光地となっています。人口は600人ぐらいだといいます。また、姓はすべて「廖」さん。山の斜面の村ですから平地がほとんどありません。周りの山々を切り拓いて棚田に変えて稲作を行なっています。長年の人間の営みがみが生み出したみごとな風景です。標高はそれほど高くありませんが、用水施設ははなき、すべて天水に頼るしかないようです。四月初旬にはまだ耕作は始まっていませんでした。四月でも夜はけっこう冷えます。五月になって田植えが始まるそうです。

住民の住まいは、急斜面に建てられています。中国ではめずらしく杉の木を使った木造建築です。三階建てほどの大きな家（3～4間×7～8間ぐらい）で、天井裏もなかなか広い空間でした。

§ 木造家屋の一番下は道具置き場や豚小屋になっている



◇木の建築文化

§ 斜面に建てる家屋の特徴的な部分



§ 建築中の民家の木組み



§ 柱の土台は自然の石を使う



この地域には、独特の木造建築文化があります。日本と同じような木組み建築の文化です。民家は急斜面に建てられているため、山側と反対の崖側により長い柱を建てなければなりません。その崖側の最上階の床部分を少し外へはみ出すようにして柱を浮かせ、下部に装飾を施しています。また、階下の空間を作業場や物置にしています。土台は地面に頭部が平らな石を置いただけで、それに柱を建てます。これも日本の昔の立て方とまったく同じです。コンクリートで土台を作るようになるまでは、日本の家屋はこのような土台でした。奈良時代まで遡っても寺院などの大きな木造建築物の礎石はみなこのようになっています。縄文・弥生時代まで遡ると掘っ立て柱で、柱を直接土の中に植える方式ですから、新しい木造建築の文化は中国大陸の建築文化によるものかも知れません。

§ 杉材を使ったホテル内部



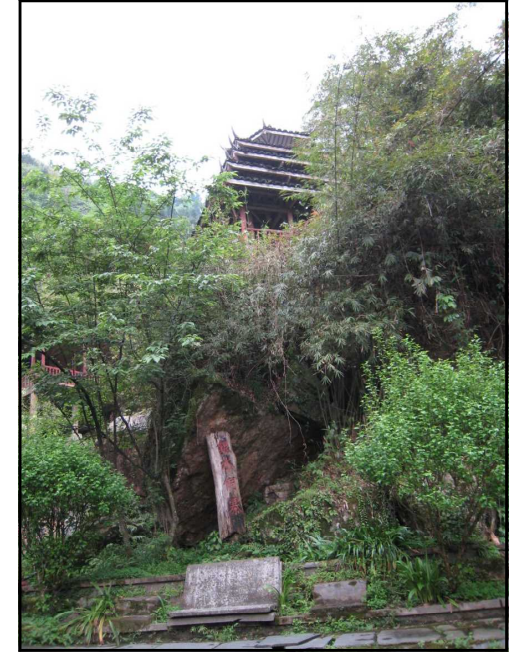
§ トン族の公共的な木造建造物 風雨橋



§ 風雨橋を渡ってチワン族の村へ入る



§ トン族の鼓楼 (撮影場所が良くなかった)



木造建築は民家だけでなく、共同の伝統的な建物にも見られます。その一つは風雨橋です。これは村へ入る入口になっています。トン族の村にもチワン族の村にもあります。上の二枚目の写真は、チワン族の平安村へ入る風雨橋です。村は比較的高い所にあります。必ず麓に谷川が流れている場所に立地しているようで、村へ登って行くときに、この谷川に掛けられた橋を渡るように道がついています。

風雨橋の名称は、地元の人々の説明によれば、雨や風が吹く天気の良い日には、屋根のかけられたこの橋の中に入って休憩するところからそう名付けられたのだそうです。橋の上にはベンチもあります。

また、鼓楼は村の精神的な拠り所のようなものです。構造は違いますが、なんとなく五重塔に似ています。ただし、芯柱はありません。吹き抜けで内部を覆う部分もありません。詳しい取材はしていませんが、外観からみて見事な木組みの文化を表わしています。

§ 鼓楼の内部から天井を見上げたところ



◇食べ物

§ 竹筒に味を付けた米を詰めて焼く竹飯



§ 竹を割って食べる



§ チワン族金竹村の家庭の囲炉裏



竹に味付けした米を入れて炊く料理法は、この辺りに限られた食文化ではない。竹が生えているこの辺りに広範に見られると思う。

囲炉裏の燃料は木材の切れ端だった。近くの山は耕地に変えられて樹木はない。木材は、それほど豊富にあるわけでもない。四月でも夜は山の気温が低く、住民は室内で防寒具を着ている。

日本から雛祭の菱餅を持って行って、現地の人々の反応をみたが、評判は今ひとつだった。

§ 日本から持って行った雛祭りの菱餅を焼く



§ 民家の囲炉裏を囲んで



◇村の伝説 — 莫一大王伝説 —

§ 歴史を歌で記録し続ける寥肇珠さん



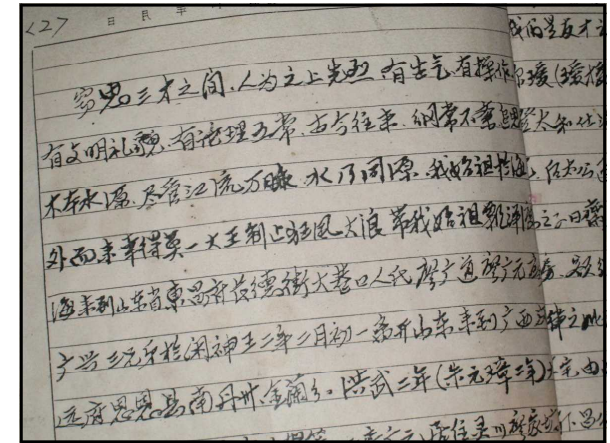
§ 寥肇珠さんの「公元時代歌」冊子



§ 莫一大王像



§ 「莫一大王」の文字が見える



彼らには、自分たちの祖先が中国北東部の山東省から移住してきたという伝説があります。そのとき彼らを率いてきたのが莫一大王だったと信じています。伝説では、莫一大王は山東省の海の島に居た神でした。今でも「莫一大王尊神」としてチワン族の人々の尊崇の対象となっています。

解放後の地域の学校の名前もこの神の名を冠した「莫一大王学校」だったといひます。寥肇珠さん（69歳）はその卒業生でした。寥肇珠さんは努力家で中国語の普通語を身につけ、平安村の人々にそれを教えたそうです。自分は普通語をこの村に広めた最初の人だと自負していました。

莫一大王の伝説に詳しい友人が居るとのことで、真っ暗な夜道を歩いて寥輔林（69歳）さんのお宅にお邪魔しました。残念ながら、伝説を詳しく書いた本は、文化革命時代になくしてしまったとのことでした。

§ 寥輔林さんの居間で莫一大王の話聞く



◇歌う人々

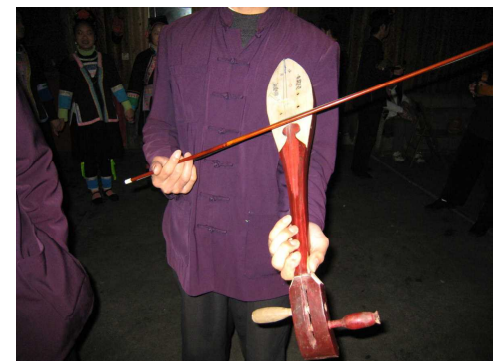
§ 歌が上手なチワン族の女性



§ トン族の若者たちの「蟬の歌」の合唱



§ トン族の弦楽器



写真左上は歌がうまいチワン族の既婚女性です。旧暦の三月三日に歌掛けの祭があります。彼女は、歌掛けで結婚相手を決めたそうです。車内に誘って少し歌ってもらいました。

また、トン族には見事なハーモニーを奏でる伝統的な合唱曲があります。楽器も多彩で、芦笙はもちろん、指ではじく五弦、三弦の撥弦楽器、弓でこすって奏でる牛股琴などを見かけました。写真右上の若者は五弦を伴奏に村に伝わる長編の物語を歌います。時間的な制約があってその物語を取材することはできませんでした。

なお、ここに掲載したトン族の音楽の写真は、銀水侗寨の観光施設の中でのものです。

◇少数民族の子どもたち

§ お兄ちゃんに抱かれて（チワン族の子）



§ 縫いぐるみを抱いて（ヤオ族の女の子）



§ おばあちゃんに抱かれて（ヤオ族の子）



この地域の少数民族にはヤオ族もいます。その女性たちは髪を切らずに伸ばすのが習慣のようで、身の丈にあまるほどの豊かな黒髪を自慢しています。

§ ヤオ族自慢の長い黒髪

